

令和5年度 学校園評価シート

(様式2)

学校園名	野口幼稚園
------	-------

1 教育目標	心豊かで 共に育ち合う子供 ー自然や様々な人ふれあい、感動体験を重ね心豊かに育ち合うー
--------	---

2 基本方針
幼児の一人一人の特性や発達を捉え、安心安全に園生活を送るための適切な援助や環境構成を工夫する。また、年長児は就学を意識しながら自立心、学びに向かう力や協同性を養い、小学校や地域との関わりや体験活動を通して健康で主体的に行動できる幼児の育成を目指す。

3 指導目標
(1)自分で考え、行動できる子 (2)思いやりがあり、心のやさしい子 (3)ねばり強く、最後までやりぬく子 (4)よいこと、悪いことのけじめがわかる子 (5)豊かに感じ、素直に表現する子

評価基準 A:できている B:だいたいできている C:あまりできていない D:できていない

重点目標	評価項目	達成状況	成果	課題と改善の方策	自己評価の適切さ (関係者評価)	達成状況
基本的な生活習慣を確立を図る	◎自分で考え、行動できる子 ・挨拶や基本的な生活習慣の確立をめざし、発達段階に即した生活を送ることができていたか。 ・幼児の体調、けが、事故などに関して常に敏感に対応し、保護者と連携を取りながら適切な処置を行っていたか。 ・指導計画に基づいて、幼児が主体的にかかわりたくなるような環境構成、遊びを深めていくための工夫をしたか。 ・一人一人の発達段階に応じた対応や視覚支援等を行うことで自信をもって行動できるよう支えたか。	A	○3歳児を中心に排泄や食事のマナー、衣服の着脱等、保護者とも連携をとりながら、きめ細やかな対応を行った。特に介助が必要な幼児には個々の発達段階に応じつつ、1年間かけて少しずつ段階を踏みながら支えていった。 ○4、5歳児は自分でやりたい、やろうとする気持ちを尊重し自分で出来た満足感が自立心につながるように支えた。特に時間に余裕をもち、あせらず出来るように見守ったことで着替えや片付けなどは習慣付いてきている。5歳児は特に就学に向けて3学期は自分で意識できるような声掛けを行ったことで家庭でも出来るようになったと保護者からも喜んでもらっている。	△個別支援を要する幼児が多く、他の職員と相談しながら進めたが難しい面も多かった。来年度以降もより個別の支援を要する幼児が増えることが予想されるので、基本的な生活習慣の確立を中心に個々の発達に応じた過ごし方を園全体で共通理解する必要がある。 △幼児たちは、より自分で考え、行動できる力が求められる時代を生きていくが、そのために教師自身が最新の情報や考え方をアップデートしていくことが必要であると痛感した。	老人クラブのふれあい会の時等、幼児から挨拶や返事が元気に返ってくる様子から、先生方の指導が活きていると思う。今後もこの姿が続くように期待している。	A
主体的に活動し、豊かな感性と物事に取り組む意欲、態度を育てる	◎ねばり強く、最後までやりぬく子 ・体幹を鍛える遊びを取り入れたり、竹馬やパカパコ、なわとび等を通して集中して遊んだり、挑戦意欲を高めたりできるような支えを工夫したか。 ・鬼ごっこやドッジボール等戸外で思いきり体を動かしながら、簡単なルールを守り集中して取り組めるよう支え、充実感や満足感を味わえるようにしたか。 ◎豊かに感じ、素直に表現できる子 ・一人一人の育ちにに応じた認め、励ましを行い、遊びや興味に応じた環境を整え、行事や様々な遊びへの意欲を高めたか。 ・幼児の気持ちに共感したり、一人一人の幼児の思いを把握しありのままを受け止めたりして内面理解に努め、思いを素直に表現できるように関わったか。	B	○竹馬、縄跳び、こま回しなど頑張り表等を作成したことでより目標に向かって遊ぶ意欲が育った。また個々に合わせてスモールステップで取り組めるように工夫すると共に達成する喜びを感じられるように支えたことがもっとやってみたいという気持ちにつながった。 ○自分の思いを表現し、相手の気持ちを受け止められるよう橋渡ししていったことで、3学期の生活発表会ではクラス全体が友達を支え合い、創り上げていく喜びや面白さを感じる事が出来た。	△より自分たちで遊びを創り出す力につながるよう教師がモデルとなったり、環境構成を見直したりする必要があった。また少しのことで園庭開放中に怪我をする幼児もいた。遊具や道具を扱う中で危険を察知する力、安全の感覚を身に付けてほしい。そのための経験を増やせるようにしたい。	・運動会やこま回し等一緒に活動させてもらう中で一人一人の良さや頑張りに寄り添っておられる様子がよくわかった。 ・運動不足で怪我をする幼児も多いと聞く。これからも計画的に運動遊びや集団遊びをして、体力向上に努めて欲しい。	A
様々な遊びや交流体験を通して、人とのつながりを大切に感じる子供を育てる	◎思いやりがあり、心の優しい子 ・自然や生き物に対する感性を持ち、心や体をつかって表現したり、遊びに取り入れたり出来るよう保育実践や教材研究に努めたか。 ・異年齢児とのかかわりや飼育栽培物の世話を通して、あこがれや思いやりの気持ちをもって接することができる機会を備けたか。 ◎よいこと、悪いことのけじめがわかる子 ・善悪の判断、思いやりなどの道徳性を培う上でもモデルとなり、教師自身が幼児の心を傷つけたり、人権を損なったりするような言葉や態度、かかわり方をしないよう心がけたか。	B	○年長児は様々な行事を幼児自ら目標に向かって遊ぶことができるように計画したことで、クラス活動を自分事として捉え、より楽しくなるように工夫したり、問題に気付き、解決するために試行錯誤したりする姿が育った。またその中でクラスへの帰属意識、チームワークの大切さを高めていった。そのことが相手の気持ちに寄り添う力につながった。 ○ウサギ当番や生き物探し、栽培物の水やりなど身近な自然に触れて遊べるように計画し取り組んだことで思いやりの気持ちや世話をしようとする自発的な姿につながった。 ○ペア活動を通して互いを思いやったり、あこがれの気持ちが育った。また、簡単なルールや決まりを教え合う姿も見られるようになった。	△当初、他者の気持ちに気付きにくい幼児、自分の素直な思いを出し切れない幼児、自分の思いを強く出し過ぎる幼児の姿が目立った。次第に共感し合いながら生活する喜びを感じ、今では仲間意識をもって生活する姿が見られるようになったと思うが、これからも教師間、保護者と相談しながらより他者と生活や遊びを豊かにしていく力を身に付けられるような保育を計画していきたい。 △入園児数の減少によって様々な弊害が予想されるが、より個々のよさが活かされ、友達との関わりが深まる保育を計画していきたい。	・保護者の気持ちに寄り添い、一緒に子育てしていくことはとても大切である。来年度からPTAから保護者会へと変更になるが、これからも園の良さを活かし家庭と連携しながら子供達のために活動していきたい。	B
地域・家庭・学校園が連携し、地域総がかりの教育を推進する	・地域、特に老人クラブや野口自治会との連携に努め、季節の行事や苗植え体験、もちつき大会等でのふれあいを通して様々な方への感謝の気持ちをもてるよう支えたか。 ・ユニット会議や青少年育成連絡会議などの内容を共通理解し、地域、小、中学校との連携や就学への憧れをもつ機会となるよう工夫できたか。	A	○青少年育成連絡会議やユニット会議など地域や小中学校との連携を大切にした。小学校とは特に連携を密にし、製作展の見学や給食試食会に参加させていただくことで幼児にとっても良い学びの機会となった。また互いの授業や保育参観に来ていただいた事が今後の課題検討や幼児理解につながった。 ○地域の方や老人クラブの方々、ゲストティーチャーの講師の先生にお世話になり感謝している。幼児にとって地域の方への親しみや感謝の気持ちをもつ機会となっている。	△5歳児には教師の話や絵本等で小学校の暮らしなど伝えたが十分ではない。3月の忙しい時期での交流はなかなか難しいが、小学校の校庭に出かけ、慣れ親しむ等出来る限り小学校への抵抗を無くし、希望をもって登校出来るように支えていきたい。 △支援の必要な幼児や環境の変化に対応しにくい幼児が増えている。行事の持ち方について検討し、幼児が気持ちよく過ごせるよう模索していきたい。	・今年度コロナ前のふれあい活動も復活している。引き続き地域や学校との連携を密にし、人との関わりを大切に育てていって欲しい。	A
教師の資質向上・研修の充実に努める	・各学年の遊びや活動の連携や学びの連続性、気になる幼児のことについて話し合い、互いの保育に活かすことが出来たか。 ・小学校につながる学びについて考慮したクラス便りやドキュメンテーションを作成し、3学期からはスクリレでの配信を行い保護者への啓発にも努めたか。 ・保護者からの意見や上司からの指導を真摯に受け止め、反省し、課題を見つけ、フィードバックしながら保育に努めたか。	B	○年間を通して教師間で幼児の発達や保育の向上に向けて相談しながら保育を進めることができた。特に気になる幼児や支援の必要な幼児については日々話し合い、指導について職員間で連携に努めている。 ○保育ドキュメンテーションに加えて、3学期からはより保護者にも見てもらえるようスクリアプリで配信するなど、保育の可視化に努めた。また園長から指導を仰いだり、教師間で意見を交わしたりしながら資質の向上を目指した。	△保育の資質向上のために時間をつくり出す努力が必要である。様々な働き方の職員が増え、保育の伝え合いの時間が減少している。職員会議だけでは足りないのも、思いを伝え合う場が必要である。 △教師同士、研修等で得た学びを共有し、教師全員で協力して全園児が育っていける環境構成、援助や保育の可視化等を模索していきたい。	・研修等忙しい中でも職員間の連携を取りながら子供達のために関わっておられることが伝わる。来年度もいろいろ学んだことを共有し、より良い子供達を育てていって欲しい。	A